

士官養成と中学校

荒木 肇

1887(明治20)年6月から陸軍将校の補充方法として士官候補生制度が始まります。それまでは士官生徒といわれていました。欧州諸国では、士官候補生制度の有無によって陸軍士官学校(以後、陸士とします)の学術教育体制に大きな違いが見られました。士官候補生制度をとっていたプロイセンの陸士では軍事科目の履修に重点がありました。これに対して、フランス・オーストリア・イタリア・ロシア陸軍では候補生制度をとりませんでした。軍事科目の履修の基礎としての一般普通教育も士官学校で行っていました。フランス陸軍の影響を大きく受けていた日本陸軍も陸士で普通学も教えています。

■士官生徒時代

第1期生(明治8年入学、同10年12月卒業)から第11期生(明治22年7月卒業)までを士官生徒時代とい

います。日露戦争(1904~5年)で将官、あるいは参謀、聯隊長などで活躍した世代です。この人たちは入校までの経歴に特色があります。

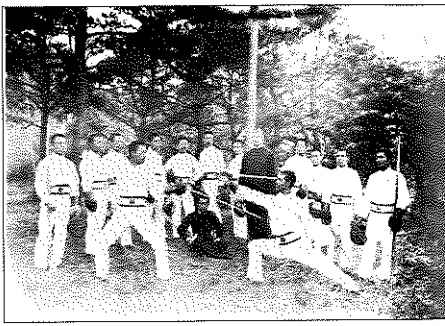
近代国民教育制度では初等教育、中等教育をおえて、さらに高等教育へと進みます。現在のような小学校から中学校へ進み、そこから高校、大学へゆく、その原型が出来たのは、明治10年代末(1880年代中)から20年代末(1890年代中)までのほぼ10年間の施策の結果でした。

したがって士官生徒たちの幼少期(幕末から明治初期)には、いまのような小学校・中学校はありません。塾や私立学校で漢学教育をはじめ、普通教育などを受けました。そこから師範学校を出たり、陸軍教導団などを経たりして入校した人が目につきます。

あるいは士官学校幼年生徒といわれる課程の修了者でした。当時、青年生徒は速成教育で少尉になり、幼年生徒はフランス語や一般普通学を十分に修めてから陸士の課程に進み少尉になったのです。

採用にあたっては学力試験がありました。ただし学歴は問われません。年齢は満16歳以上で同22歳以下でし

た。入校してからの陸士での教授内容の水準はたいへん高かったようです。たとえば数学の授業では「三角法」がありました。これは高等中学校(後の高校にあたる)第1学年と第3学年の内容です。当時の進学率は高等中学校へは0.4%(1000人で4人)ですから、理数系の陸士教育は国内最高レベルととってもいいでしょう。



写真：フランス人教官から軍刀術を習う士官生徒(明治20年頃)

数学・平面幾何学)のみで受験できました。

士官生徒時代の卒業生は1285人とされています(『陸軍士官学校』1969年、秋元書房)。

■士官候補生制度

士官候補生第1期は1888(明治21)年11月に入校します。士官学校の期別はここから数えます。1890(明治23)年7月卒業です。ここから36期生(1924=大正13年7月卒業)までの人は、多くは中学校から士官候補生を受験しました。採用されると、各兵科隊附1年(幼年学校卒は6カ月)、ここから陸士へ分遣される形式になりました。陸士教育を受け(12月上旬から翌々年5月下旬)、原隊へ復帰、見習士官(曹長の階級に進み)として6カ月以上の勤務を行い将校団の詮衡会議を経て任官しました。

■尋常中学校卒は無試験

最初の尋常中学校は1886(明治19)年4月に「中学校令」で規定されました。中学校は府県立尋常中学校と官立高等中学校の2種に分けられます。官立とはいまでいう国立

のことです。寮歌で有名な旧制高等学校は1894(明治27)年にこの高等中学校から中学という名称が除かれたものでした。

尋常中学は5年修学、高等中学は3年同というものです。そうして帝国大学に進めるのは原則としてこの高等中学校卒業者だけでした。

官公立中学校(尋常が取れました)

1900(明治33)年には全国に184校、生徒数は約6万人でしかありません。私立は34校でした。生徒数は約1万4000人です。手元に1895(明治28)年の公立卒業生の進路の記録があります。この年は全国でわずかに1170人が卒業しただけです。そのうち44%が高等中学校へ、11%が専門学校へ進み、士官候補生、海軍生徒、もしくは兵役に就いた者が8%でした。

■陸士の教育が変わる

士官学校条例によれば、教授の科

目は、戦術学、軍制学及軍用言語、兵器学、築城学、地形学及地理図学、外国語学でした。訓育の科目は、練兵、射撃・距離測量、体操、剣術・銃剣、乗馬(馬匹の掃拭、飼養、装鞍なども含む)です。諸勤務の訓戒

とされるものもありました。内務、軍紀、衛戍勤務、銃その他兵器の使用法です。

大きな改革は純然たる軍事学が中心になっていくことです。プロシヤから学んだ方式でもありますが、普通学科目は幼年学校と尋常中学校での履修が期待できたということでしょう。「陸軍各兵科現役士官補充条例」(1887年)によれば、幼年学校卒業生と尋常中学校の卒業証書をもつ者は無試験で士官候補生に採用することになっています。

興味深いのは当時の幼年学校の修業期間です。その頃は中学校の3年生であるときに3年制の幼年学校に入ります。そのため中学校入学から5年6カ月で候補生に採用されました。対して中学校は5年制ですので、半年の差ができてしまいます。そこで兵科ごとの隊付期間を中卒1年、幼年卒6カ月とすることで釣り合いをとりました。

次回は高等教育の大改革(大正半ば)によって変わっていった陸士の教育について書こうと思います。

また1885(明治18)年12月の

規則では、受験問題は和漢文・数学・代数学・平面幾何学・地理・物理・化学・図学・画学・歴史・外国語学となつています。ただし中学校卒業者は和漢文・歴史・算学(数学・代